記念講演

三草二木に見る「ごちゃまぜ」社会の可能性

雄谷良成

司会　ご講演に先立って講師のご紹介をさせて頂きます。雄谷良成上人は、一九六一年生まれ、現在は、蓮昌寺のご住職、社会福祉法人佛子園理事長、公益社団法人青年海外協力協会理事長、一般社団法人生涯活躍のまち推進協議会会長をお務めです。金沢大学教育学部で障害者の心理を研究され、卒業後は白山市で特別支援学級を立ち上げ、教員として勤務。その後、青年海外協力隊員としてドミニカ共和国へ派遣。現地で障害福祉・教育の指導者育成、医療過疎地の病院設立に携われたそうです。帰国後、北國新聞社に入社。メセナやまちおこしを担当されていたそうです。六年間勤務された後、実家の社会福祉法人佛子園に戻り、星が岡牧場、日本海倶楽部などの社会福祉施設や、三草二木西圓寺、Share金沢、B's行善寺など、さまざまな人が共生できるコミュニティー拠点を作る他、社会福祉法人としては初めてとなるＪＲ美川駅の指定管理も手がけていらっしゃいます。現在は、輪島市と提携してまちづくり輪島ＫＡＢＵＬＥＴに取り組まれているそうです。

それでは、お時間となりましたので、雄谷先生に「三草二木に見る『ごちゃまぜ』社会の可能性」と題しましてご講演頂きます。雄谷先生、どうぞ宜しくお願い致します。

雄谷　それでは、お題目三唱で始めさせていただきたいと思います。南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経。

今日は約一時間ということでお時間をいただきました。何よりも、ここにお呼びいただいたこと、五十回記念という、すばらしい、栄えある回に私のような若造を呼んでいただいて、本当にありがたいなと思います。今日は、金沢から新幹線に乗ってやって参りました。金沢駅のトイレに入りましたら、高野誠鮮上人とばったり。スーパー公務員、法王に米を食べさせた方にばったりお会いしまして、最近、何か高野上人とご縁があって、一緒に何かしろということなのかなあなんて冗談を言いながら、今日はやって来ました。

先ほどご紹介を頂きました通り、私は金沢東山の蓮昌寺というお寺の住職を務めておりますが、そもそも私が生まれ育ったのは金沢の隣にあります白山市の行善寺というお寺であります。まずはそちらのお寺のことからですが、私の祖父は小さいときに両親を亡くし、そして妙成寺というお寺に預けられ、そして僧籍につくということがありました。お寺には、まだ社会福祉法人という形式をとらずに、二十人も三十人もの戦災孤児が集まってきており、それでどうしてもお寺の中では守り切れないということで、昭和三十五年に私たちの法人ができました。私は昭和三十六年生まれですので、その法人が立ち上がったときには、お腹の中におったという話であります。

まずは、その動画を用意してまいりましたので、十二分程度のものですが、まずはご覧いただきたいと思います。よろしくお願いします。

（動画の放映）

雄谷　はい、ありがとうございました。それでは、見ていただいた動画の中に「ごちゃまぜ」という話が何度か出て

きたと思うのですけれども、三草二木・万民仏果、そういったことについて少しお時間をいただいて話していきたいなと思います。

先ほどご紹介をさせていただきましたが、私は昭和三十六年生まれ、五十六歳で、この中で育ちました。小学校中学年ぐらいまでは本当に多人数部屋の、八人から十人、よく多くなったり少なくなったりしますけど、その中で育ちました。これが私の最初の「ごちゃまぜ」だったのです。

ちょっと時間は飛びまして、私は昭和六十一年の青年海外協力隊の二次隊で、障害者の指導者の育成のためにドミニカ共和国というところに行きました。着いて現地着任した途端に催涙ガスの水平撃ちに遭いまして。あれは本当に痛いですね。肌から入ってきて、転げ回るほどの苦しみでした。電気もない、水もないところでどうやって運営していくかということで、教える学校というか、黒板もないということで、まずどうしたかというと、鶏を育てました。鶏を育てた後に、それを売ってお金を捻出したり、次は鶏糞で畑を作って、それでお金を作って人を教えるベースを作りました。こんな風にして向こうの障害福祉の指導者の育成に当たっていました。これも一つの「ごちゃまぜ」ということです。

青年海外協力隊は公用パスポート、グリーンパスポートで行きますので、出国するときも、当時は最敬礼で見送られる。そして、いろんな意味で特別待遇を受けるので、勘違いするんですね。自分が日の丸を背負ってこの国を助けてみせる、なんていうばかげた話を夢見て行くわけですけど、二十代半ばの若造がどれだけ転がり回っても、もし成功すれば、それは粋がってやった日本人が何か頑張ったなって話ですし、失敗すれば、一人で踊って終わったなっていうようなことなのですけど。一つ大きく影響を受けたのは、こんな社会保障のなく貧しい国が、今は相当よくなりましたが、何でこんなに幸せ感が高いのだろうかということでした。何もない、何もないのですが、人が繋がり合っている。そのことが私には衝撃的でした。自分も施設の中で育ちましたので、いろんな人に支えられたり、いじめら

れたり、かみつかれたり、殴られたりもしながら育ったわけですけど。しかし、何か懐かしい心持ちというのがあって、このことが後々、私の人生に大きく影響したと思います。

一昨年ぐらいに安倍総理が来られた。生涯活躍のまちというこのShare金沢というのが整備のモデルになったので来られました。まあ、こういったのも一つの「ごちゃまぜ」なんだと思いますが。何よりも影響を受けたのは、先ほどの動画の中でありましたけれども、あのお寺は西圓寺という、真宗大谷派のお寺、直参道場だったのです。それが三年ほどの間住職が亡くなられて無住状態になった。ところが、代務住職さんはあんまりお世話をしないということで、私の友人がそこの代務住職さんのところの檀家総代だったものですから、なぜか私のところに何とかならないかと話が来まして、相談に乗ることになりました。最初にうかがった際、五十五世帯ぐらいのところに檀家さんが僅かにいました。その檀家さんのおばあちゃんに、「私が生きている間にこのお寺を潰すと、私は死んだらあの世に行けない。先祖に会わす顔がない。」と、言うわけです。「ですから、何とかして下さい。」「いやいや、僕は立場上、南無阿弥陀仏とは言えないんです。」「いや、いいですから。」「いや、いいですからって、私が難しいんですよ。」っていう話をして、「まあまあ、それでも。」ということで。でも、なかなか、檀家さんも散り散りばらばらになっておりまして、これ以上法人存続は難しいということで、「じゃあ、皆さんが集まるような場所として、みんなで守っていこう。」ということでお預かりをすることになりました。

あるとき、これは首から下が動かない、ハイバックの車いすに乗った方です（資料14）。知的にも障害がありますし、首から下は麻痺で動きません。ここには、足湯に入っている元気な高齢者もいれば、あるいは認知症、あるいは知的障害、あるいは身体障害を持つ方もおられるのですけど、ある日、この中の認知症を患った方が自分のもらったゼリーを彼に食べさせようとしたのです。僕はたまたまその場所にいたのですが、このおばあちゃんは手が震えて、上手くいかないだろうなと思いました。彼も何か、全然見えてないのです。で、ぼーっとこぼれて落ちる。それが毎

日そのおばあちゃんはあげよう、あげようとするのです。そしたら何と、二、三週間ぐらいしたら、彼が貰いに行くようになったのです。びっくりしたのは、彼は今では首が七十五度ぐらい動きますが、その当時は三十から四十度ぐらいしか動かなかった。その以前に、リハビリのプロが二年間ほど一生懸命リハビリをするわけですが、なかなか良くならない。ところが、二、三週間も認知症のおばあちゃんがあげようとするゼリーを食べよう、食べようとすると、なぜか動くようになったのです。これは衝撃的なことでした。理学療法士からすれば、「なってなかった」という話になる。

二、三ヶ月して認知症のおばあちゃんのところのお嫁さんがやって来ました。「どうも、いつもお世話になっています。」「ああ。」「本当にうちのおばあちゃん、西圓寺に来るようになってから、週に二回も三回も深夜徘徊していたのに、めっきり少なくなったんです。本当に西圓寺のおかげです。ありがとうございます。」とおっしゃいました。私は、「ああ、それは良かったですね。」と。「ところで、一つだけわからないことがあるので、教えてもらえませんか。」っておっしゃいました。「どうしました?」って聞きましたら、「『私が西圓寺に行かないと、あの子が死んでしまう。』って、おばあちゃんが言っているのですけど、あの子って誰ですか?」と。あの子って、この人です。このことは、さらに我々にとって衝撃的なことでした。

WHOが二〇〇七年に提唱した、高齢者に優しい都市（Age-Friendly Cities）というのは、高齢者も障害者も、いろんな人たちにとって、町のどういったところがきちんと整備をされていけば、安穏に暮らしていけるのか、というところなのですが、例えば福祉とか医療というものは、住宅や日々のサービスぐらいしかカバーしてないですね。ところが、人が関わったりとか、あるいは認められたり、あるいは働いたり、学んだり、情報をもらったり、ということに関しては、少なくとも福祉や医療では見られません。これを寺院というものをベースにして考えてみるとどうなるのか。以前はですね、たくさんの方が集まり、そして様々な情報を共有しながら、そこで怒られたり、あるいは褒

められたりしながら、いろんな活動が行われて、そして、あるときには学び、いろんなものが寺院を通して行われていった。それが、どんどん切り売りをされている。ですが、先ほどあったように、認知症の人と重度心身障害の方が関わったら元気になる。それは、全くプロをほったらかしで起こったことなのです。我々寺院も、今、全てのことをカバー出来るかというと、そうではないのだということをもっと真摯に受けとめなくてはいけない時代に来たのではないか、と。そうだとすれば、どうしなくてはいけないのか。我々がカバー出来なくなった分野をいろんな人と関わりながら支えてゆく。専門家が専門家だけでやっていくという時代はもうおしまいになったのではないかと、そんなことを教えて貰えるような一枚でした。

この人（資料なし）は、先ほど（動画の中で）活気が出てくると話されていた、西圓寺の近くの東酒造の方。五十五世帯しかいない部落にある造り酒屋のおやじっていうのはとても力を持っています。黒いものを白って言ったら白ですし、白いものを黒って言ったら黒なのです。大変なおやじなんですね。ここら辺一帯では、この年齢の方で大学へ行ったのはこの人だけです。そうすると、もう全ての情報が彼の所へ集まって来る。政府専用機で出されている「神泉」っていうお酒を作っているのです。今でも政府専用機へ提供しています。この人は、まず西圓寺を復興しようということで私たちが色々と着手した際に、私のところに早速来ました。私たちは頼まれたわけですから、住民の要望に応えて「じゃあ、何とかやってこう」という話はしたわけです。しかし、彼は何と言ったのか。「雄谷さんねえ、俺はねえ、障害者やら、認知症やら、そんな辛気くさい風呂には入らん。」って言ってきたのです。またそんなことをわざわざ言わなくてもいいのじゃないかと思ったのですけど。それが、西圓寺が開く前です。開いてからすぐ、息子さんご夫婦、それからお孫さんが西圓寺にやって来るようになりました。いろんな話を皆さんと出来るようになった。そうすると、二、三ヶ月して、彼は何と西圓寺に来たのです。何て言ったと思いますか。「西圓寺」というラベルをわざわざ自分で作って持って来ました（資料なし）。これは、門外不出と言われた先ほどの、政府専用機にし

か乗せてないお酒、生酒です。そんな市販していないようなお酒を使って、自分でラベルを作って、「申しわけない。大変失礼なことをした。二、三ヶ月、うちの息子や孫、あるいは何よりも今、西圓寺にいろんな人が集まるようになってから、俺のところには誰も来なくなった。」というわけですね。

やはり先ほど言いましたが、今までいろんな人との情報、つながりがあったときは元気だったのですけど、誰も行かなくなったら、ぽつんと孤立したのです。それで西圓寺に来るようになったのです。今、その彼は造り酒屋の社長から会長になりました。息子さんに代を譲ったわけですけど、九年後の今どうなったか、こういう感じです。（資料なし）鼻、赤いですね。これは午後四時ごろです。もう既に飲んでいます。三時ぐらいから飲み始めているのです。で、自分の作った酒を升に入れて飲みながら、「いつものやつ出してくれ。」って言うと、障害のある人たちがすっと出すのが串焼き二本です。あれだけ横柄だった彼が、九年間たってどうなったかといえば、ここで好々爺というか、飲みながら、いろんな人と話をしながら過ごしている。という、そんな場所になりました。

「ごちゃまぜ」というのは、そういった意味では、先ほどの障害のある人、認知症の人、そうでない人も含めて、「全ての人には役割がある。」と思ったのです。ところで、フィジーという国に行きまして、幸せ探しに行ったんです。日本のＧＤＰの十分の一ぐらいの国ですけれども、非常に幸せ感が高い。ここは入所施設がないのです。具合が悪くなって認知症になったら、高齢者を特別養護老人ホームに入れる。あるいは、障害が重ければ障害者の入所施設に入れる。そんなことはしないのです。じゃあ、どうやってその人たちは生きているのかというと、地域みんなで見守っちゃうんですね、びっくりします。日本の十分の一しか経済力のない国が、全くそういった福祉のサービスを受けないでも、きちんと地域で受けとめていく。そんなことができる国の人に、僕が生意気にも「全ての人は役割を持っている。」という話をしたら、「ミスター雄谷ね、それは我々にはちょっと違うかもしれないね。」という話をされたのです。「どういう意味だ？」と聞いたら、こんな風に言われました。「全ての人が機能している。っていう感じだと思

うよ。」という答えを聞かされました。三草二木、全ての人が機能しているという事。私も生まれたらすぐ施設の中にいましたので、半世紀以上そういった現場にいながら、お寺と福祉とを感じながらやってきたつもりですけど、「ああ、また殴られたなあ。」というのがこの一言でした。

先ほどの廃寺の様子を説明しますと、高齢者、障害者、子供、野田町の住民。みんなこうやってつながり合っていくとどうなっていったか。これは二〇〇八年から二〇一六年まで（資料20）。そして二〇一七年、今年ですが、実を言うと、七十五世帯まで増えました。二十世帯。これは石川県ではここだけです。小松市というのは十一万人弱いますが、この中で唯一、世帯数、人口増しているのがこの地域です。なぜ、こんなことが起こったのかを聞いてみました。二十軒の人たちに様子を聞くと、半分は若い人が戻ってきたとの事でした。残りの半分は、この西圓寺に何らかの形で、口コミ等で来て、何か居心地がいいと言うのです。その居心地がいいというのは二十世帯全てでした。何で居心地がいいのですかと聞いたら、「実を言うと、最初はびっくりした。障害のある人が奇声を上げたりとか、認知症の人が突然掴んだりとか、いろんなことをするんだけど、しばらくしたら慣れました。それで、何か居心地いいんだよな。」って。今まで、社会からはね飛ばされて周辺に追いやられていた人が、一緒に住むことになると、それが居心地のいいという話になってきた。それは僕らにとっては非常に大きなヒントなのです。

フランス・ドゥ・ヴァールという動物行動学者が、二〇〇七年、世界でも最も影響力のある百人にタイムズ紙で選ばれました。皆さん、なぜ「あくび」がうつるかってご存じですか。あくびって、伝染しますよね。こんな我々の日常的におこっていることを解き明かしたら、何と、世界で最も影響力のある百人にフランス・ドゥ・ヴァールという人は選ばれたのです。どんなことかというと、人は、あくびをしている人を見ると、あいつは眠たいんだなと思って、自分の脳の中にその人の状況を再現することができる能力があるそうです。それは、動物行動学で言うと、同一性あるいは同調性というのですが、例えば鳥が一羽飛び立つと一斉に飛んだりするじゃないですか。あれと同じなのだそ

うです。また、人間で考えると、産婦人科で赤ん坊が一人泣き出すと皆一斉に泣き始める。あれも同じなのだそうです。まあまあ、そこは何となくわかるかなという話になるのですが、実を言うと、これは性善説なんです。あくびがうつるということは、先ほどの動物行動学で言う同一性あるいは同調性というんですが、人間の言葉にすると、共感力。共感力は、後から学んで出来るものではないということの証明をこの人がしたので、世界で百人の中に選ばれたのです。性善説、人間の共感力が生まれつきあるということを科学的に証明したから百人に選ばれたのです。

その翌々年、今度は二〇〇九年、ニコラス・A・クリスタキス、ハーバードの先生です。この方も、同様に百人に選ばれました。どのような研究かというと、一マイル圏内、一・六キロ半径の中の地域においては、誰かが「幸せだ。」と言うと、その知り合いは、一五%ぐらいは何となく幸せになるというデータ。知り合いの知り合いだと一〇%、知り合いの知り合いの知り合いだと六%ぐらいが幸せ感を受け取ることが出来る。これも何となく、聞いたらわかるのです。でも、単純に言うと、そんなことだけでは世界の百人に選ばれないです。世界に最も影響力のある百人ですから、どういう研究かというと、この人が幸せと言った、知り合いの知り合いの知り合いですから、ここの人は全く面識がない人でも影響を受けるという研究なのです。皆さん信じられますかね。知らない、自分と全く面識がない、会ったことのない人間が「幸せ」と言ったら、その人の影響を受けるなんていうことを皆さん信じられますか。我々僧侶は、本来ならそういったことを信じなきゃいけないのでしょうけど、私にはそんな能力はありませんでしたし、この本を読んでびっくりしました。

でも、何となく、思いとすれば、人が縁で、縁起でつながっていくということはわかる。誰かが幸せと言ったら、幸せはやっぱりつながっていくのだろうなと。でも、面白いのは、これは逆流するということです。この人が幸せになったら、ほんのわずかな六%の人ですが、この人が幸せになったら、幸せが戻っていく。一五%、一〇%、六%、逆流していく。それは我々の世界では因果応報と言いますけれども、何よりもこの一・六キロ圏内で、いろんな人が

地域の中にいる。知っている人も知らない人も、その人の言動が少なくともお互いに影響しているという科学データ。そして何よりも、この中には認知症の人、あるいは元気な人、あるいは障害がある人、あるいは独居、一人で住む高齢者の方もいます。もし独居の方が孤立してしまえば、幸せ感は途切れてしまう。あるいは障害のある人が差別を受けて地域で厳しい、幸せじゃない状況になったとしたら、それは不幸せが伝播していくことになるということで、これは実は、地域というものを我々はどう捉えていくべきかということの一つの大きな流れなのではないかなと。

先ほど、私たちが寺としてやれることや、全てが全てではないということを自覚する、あるいは、他の人たちにとっても同じです。そうなると、地域のいろんな人たちとつながりながら関係性を作っていくということこそが、今我々に求められているのかなという気がします。つながるということは、人のつながることを信じるということであろうと思います。

これは、宮城県で七年間も同じ人たちを追いかけたデータです（資料24）。こんな、本当に地道な研究があるのですね。七年間、生きがいのある人とそうでない人の生存率を比べると、何と生存率は三倍も違うのです。生きがいのある人は生存率が高い。

あるいは、これはシカゴのデータですが（資料25）、人生の目的を強く感じている人と感じていない人、同じ人を六年間追ったものです。これは何千人もというデータです。四十箇所の高齢者。人生の目的を強く感じている人は、感じてない人より倍、要介護にはなりにくいのです。こんなことが今いよいよ科学的に明らかになって来ました。生きる目的や、あるいは生きがいというものは、地域の中でこそ、人がつながっていてこそ感じられるものです。

これは男性のデータですけど（資料26）、ボランティア、市民活動、こういった活動に参加をすれば、要介護認定率が下がるというデータです。以前は、地域の人が寺院に来て、あるいは掃除をし、あるいは様々なお手伝いをし、そんな時代はこの様なデータはありませんでしたが、そういったことが社会を元気にしていたということなのであろ

うと。ただ、なぜこれは男性のデータを持ってきたかといいますと、世に言う高齢者デイサービスというのは、皆さん、男性と女性と、どちらの利用率が多いと思いますか。女性だと思う方、手を挙げてください。圧倒的に多いですね。三分の二。男性だと。その他、ニューハーフの人とかもいますしね。大体その通りです。じゃあ、女性のデイサービスに来る確率、男性と、どのくらいの比かというと、大体どのくらいだと思いますか。

○（会場から）六・四ぐらい。

雄谷　ああ、六対四で女性の方が多いと。はい、実を言うと、そんなもんじゃないのです。二対八とか、三対七で女性なのです。それはなぜかというと、「咲いた、咲いた」とか歌うじゃないですか。そうすると、男性は次の日から絶対来ません、嫌なんです。歌わされても困るのです。自分で孤立して家で新聞読んで、自分の好きなテレビを見て、一人でどうなってもいいという道を選びます。ところが、女性はどうなのかというと、「あら、何とかさん上手。もう一曲歌って。」と言うと盛り上がって、それを見た男性陣はもっと引きます。俺はこんな世界にはついていけないと。絶対嫌なんです。なおさら来ないです。そうすると、どうなるでしょう。今、寺院にも独居の男性陣が来るかどうかは別として、認知症になりかけの福祉のサービスの必要な人であっても、来ないのです。一回来たきりで、来ない。そうすると、女性は元気です。来ます。いろんなところに行って、人と元気にやれるのです。男性は放っておきますか。孤立させますか。そういった時に、男性はボランティアや市民活動、スポーツであれば参加をされるようです。ですから、地域の中でいろんなものが機能していく。それが支え合っていくということの、人がつながっていくということの原点だろうと思います。

行善寺の周辺ですが、いろんな人たちが歩いてやって来ます。うれしかったのは、先ほどもありましたが、この行

善寺というお寺は信者寺でありまして、檀家さんは非常に少ないです。元々は、滝谷妙成寺の隠居寺として建立されましたので、檀家数が非常に少ないのです。ここには摩耶夫人像、泉鏡花が自分の母親に似ているということで、彼の作品に大きく影響を与えた像があって、その摩耶夫人像を見るために沢山の人が訪れたのですが、残念ながら明治以降はどんどん減少しました。戦前はそれでもまだ多くのお参りがありましたが、どんどん少なくなってきていました。それが今は、いろんな人たちが集まってくる。檀家さんではありません。この辺は一向宗の集まりですから、浄土真宗が一番多いです。ですから、この周りは妙林という、私たちのお寺の名前がついた集落ですが、しかし、その周辺は全て浄土真宗のエリアですから、やってくる人はほとんどが宗派とは関係なしにやって来ます。

これは行善寺周辺、十一万人ぐらいで少子・高齢化、人口急減少という場所です（資料45）。今、金沢は人気がありますので、三十代半ばの人が子供を育てています。これはお寺を挟んで一つ反対側に隣接している、三～四十年ぐらい前にデベロップされた、県が作った団地なのですが、この人たちの子どもたちは他所へ行ってしまいました。ということは、お孫さんもいないということです。この町はどうなったか。今はこうなりました（資料47）。ショッピングセンターは全て閉店し、歩いている人は高齢者だけです。放っておくと、全国で、こんな状態になってしまうわけです。このような場所を誰が支えていくのか。これは、二年前に私たちの行善寺を一般開放する為に作った場所の開所式です（資料48・49）。普通は寺院側か、もしくは施設の職員が、開所式の司会等を仕切ります。でも、こういった空間を作るまでに地域の人と、どういった場所になったらいいのかということをずっと相談しながらやってきました。こんな場所が欲しい、あんな場所が欲しい、そこから始めました。何故かといえば、私は青年海外協力隊にいたので、まずは地元の人が何に困っていて、何を共感すべきかということをやらなければやれなかったということがあったので、まずは地元との共有、そこから始めました。

いろんな我が儘なことを言う人たちが沢山いまして、実を言うと、この人は勝手に自らボランティアで司会してい

るのですけど、私に「はい、住職、挨拶。」と言われたので、前に行って、「本日は皆さんありがとうございました。」と言っただけで、「よし。」って、終わらされたのです。何故かというと、さっさと乾杯したいんです。セレモニーはいいから、さっさと飲もうと。みんなここら辺で輪になって飲みまして、その後だんだん本音を話し始める。そこから始まりました。この人は完全にボランティアです。うちの檀家さんでも何でもありません。けれど、何故か集まって来ている。

マズローという学者がいまして、五段階欲求説を発表しています（資料50）。本当は六段階というのを今日は珍しく持ってきたのですけど。例えば、人間はおなかが減ったり、のどが渇いたりすると欲求が発生します。飲みたい、食べたいという欲求です。安全欲求というのは、死にたくない、けがしたくない、痛い目に遭いたくないというもの。所属欲求というのは、このうちに生まれました、このうちの一員です、あるいはこのお寺の檀家です、あるいはこの会社の一員です、この町の一員ですということ。また、所属している場所で認められたいという欲求、承認欲求があって、その中でいろんな経験を積んで自己実現欲求、自分が成長したいという欲求があるわけです。

マズローという方は、この五段階欲求説で名声を手にしました。ですから、これを出したときはまだ、学者としては売れてないのです。学者としては売れてないので、自己実現がしたいという欲求が一番上だった。ですから、五段階欲求説というのは一番上。ところが、幻の六段階欲求説というのを出したのです。出たというか、六段とは言っていないのですが、マズローは晩年になって、「地域の中で認められて、自分が成長する」という、もう一つそれよりも高い次元の欲求があったのだということを言い出したのです。それがこれです（資料53）。自己超越欲求。コミュニティーの発展、地域がよくなる、言葉を変えれば、人が幸せになる欲求。利他と言いかえてもいいかと思います。この段階があったのだと。

これはですね（資料51）、地域の中でああいった年寄りが出てくると、今度は子供たちも影響を受けます。この場

所を覚えておいて下さい。ここはうちの本堂ですが、ここで子供たちが、いろんな人たちが集まってくるのを見ながら感じたことを、学校に戻って発表しました（資料52）。「少し疲れたときや悩みがあるときは、ぜひ、この行善寺にいらしてください。」と言っていたのです。これは、小学校五年生の女の子です。我々は、寺院として「皆さん、悩みのあるときや困ったときは、是非、お寺に来て下さい。」ということは言うと思いますが、私たちが嬉しかったのは、この子が「行善寺へいらしてください。」と言ってくれたことなのです。疲れた人や悩みがある人はということなので、この子の欲求レベルというのは、もう既に、一番高位の「人が幸せになるという欲求」＝利他を「ごちゃまぜ」の中で経験しているということなのです。

最近の首都圏、特に高層マンションに住む人々の間では、子どもたちに、挨拶しない運動というのが行われているそうです。エレベーターのドアがあくと、たくさんの人が住んでいるので、すれ違うわけですが、そこで挨拶しない運動というものだそうです。それはそうですね。「知らない人に声かけられても話しちゃだめよ。」と、親は言います。そうするとどうなるかというと、自分の家を一歩出た。家にいる間は、所属しているという欲求はあります。しかし、一歩自分の家のドアを開けてエレベーターに行くと、もう挨拶はしないので、そのマンションや地域に所属しているという欲求は生まれて来ません。そうすると、その地域の人達に認められたいという欲求が生まれてこないので、その中で育つということ、あるいはその地域が発展していくという欲求なんていうのは生まれてこない。

この二つの事例というのは、大きく日本の未来を左右していくのではないか。時代はいよいよ参加する社会になろうとしている。行善寺の住職は父がしておりますが、私は今、実質上、二つの寺を守りながら、本当にお寺というものをどうしてったらいいのだろうというのは、やはり身につまされるところでありますが、いろんなところに参加をするというのは一つのキーなのかも知れません。自分も、僧侶としていろんなものに参加をしていくというところが必要なのではないでしょうか。

これは、先ほどの子供たちの学んでいた場所と同じ場所です（資料54）。この人はしめ縄づくりの名人で、しかし、もう地域のしめ縄を作る体力はない。もうやめたい。元気な人ですけどね。それじゃあ、みんなで何とか手伝えるものは手伝う。この人は認知症のおじいちゃんです。自分の家にも帰れないぐらいの重度の認知症の方です。この方が「俺、手伝ってやろうか。」と、言ったのです。で、作ったのがこれです（資料55）。こんな素晴らしいものをすぱって作る。認知症で家には帰れない。しかし、では誰が、他のことも全く出来ないのだと判断したのでしょうか。地域の中にいれば機能するということは必ずあるのだと。機能していくのです。これを見ていた子供たちは、走ってきて、「何しているの。何作っているの。」と、見に来ます。これは昔、お寺にあった光景です。そうするとどうなったか。これを作っているのを見て、「私たちも作りたい。」となって作りました。団子をぎゅっと練り込んで、お正月が終わったら焼いて食べます。こちらにはこういう風習はありますか。

○（会場より）岐阜の高山へ行ったら、名古屋でも正月になると売りに来ます。こちらの方では「はなもち」お餅をつけてね。

雄谷　ああ、ありますか。はなもち。これも、こうやって握って、子供たちが作りました（資料61）。だんだんそれが拡がりまして、一昨年のことですが、これも女の子です（資料62）。「町の大晦日を作ろうｉｎ行善寺」をします。大掃除、まゆ玉作り、お風呂。お風呂は無料で一般開放しています。二年前に出来たので、スーパー銭湯に行くのは恥ずかしくないそうです。でも、女の子は、地域の人たち、知っている人が来ると、やはり恥ずかしいようです。ですから、クエスチョンマークを付けています。この子が一年間いろんな人とかかわって、どう成長したか。ポスターをまた描いて貰いました。一年後に彼女が描いたポスターが、こういうポスターです（資料63）。ちょっと色が付き

ました。大掃除、お正月飾り、年越しそば。お風呂が無くなりました。毎日お風呂に入りに来ていたら、もう日常ですから、必要ないのです。これはイベントではありませんから、書かない。でも、何よりも驚いたのは、除夜の鐘つきに町のみんながここに集まるので、子供たちで綺麗にしようと言い出したのです。一年間で、「お願いします」と人にお願いしていた子が、「自分たちでやろう」ということを発信出来るようになった。こんなことが、我々にとっても非常に励みになりました。

先ほど、これは動画の中に出てきたナカガワ君という、愛着障害の子の例です。愛着障害というのは、かまって欲しいという障害です。小さい時に、自分の兄弟に親が関わったら、ぐずる。そういうのはありそうですね。でも、大きくなってきたら、今度は本当に暴れちゃうのです。親は手に負えなくなって、彼を施設に預けました。施設の職員も彼だけを見ているわけにはいかないので、他の子を見たら殴る。そうすると、今度は精神病院に入れられて、動けないほどの向精神薬を飲まされて、人にかまって欲しいという人が、個室に入れられて、折り紙を折らされた。

お母さんも、初めはいろんな神奈川県の施設に「もう一度受け入れて欲しい」とお願いをしたそうですが、全部断られたそうです。札付きになったのです。職員を殴ったり、怪我をさせる。お母さんが偶々金沢出身の方だったので、「何とかお上人お願い出来ませんか」とうちに来られましたので、職員と相談しました。相当大変な人ですから、まあ、なんとか受け入れようということで、まず一緒に働いて貰いました。掃除やその他の事を。三ヶ月位は大丈夫でした。その内に仕事が出来ない、上手くいかないということで、切れまして、その時目の前にあった包丁を、ばっと取りました。うちの職員がマークしていましたので、それを抑えたら、ぼんと頭突きを受けて、鼻を折られてしまいました。もう手に負えなくて、いよいよ本領発揮してきたなと、感じました。オール神奈川がギブアップした人だけあって、手も早い、足は出る、蹴る、殴る、頭突きは来る。大変でした。もう諦めようかという話まで出ました。私は諦めてもいいよという話をしていたのですけど、急に彼が、落ちついてくる。この子はゲームを、この子はチョコ

バーを、この子が脇に置いてあったギターを「お兄ちゃん。」と持ってきて、「ギター弾ける?」って聞きました。私はこのときそこにいなかったのですが、「ボローン。」と、下手なギターが鳴り出したので、「何だ?」と、思って本堂側から走って来たら、弾いていたんです（資料65）。ここから彼は安定して来ました。

ひょっとしたら、我々は彼を厄介者扱いしていたのではないか。彼が機能するのだということを信じることが出来なかったのではないか。もう一度信じてみようか、ということで、皆で相談しまして、彼が機能するという役割を作ってみようと考え、赤い羽募金を他の子と一緒にやって貰ったら、他の子の倍ぐらい募金して貰いました。積極的に行っているのです。これは間違いないなと感じました。また、彼は今、ウエルネスで運動していますけど、トレーナーは高齢者の相手をしています。そうなると、自分に向いて欲しくて、かまいに行くのです。そんな彼を他の人が見て笑っています。現在、彼はどういう仕事をしているかというと、重度心身障がいの子供のスイミングのコーチ、ヘルパーをしています。こんなことが出来るようになったのです。

これはまた別の方です（資料66）。去年の十月からうちに来たのですが、七年間引きこもりの人でした。七年間引きこもりの人が、十月一日から今まで一度も休んだことがありません。何故かというと、彼をここに連れてきたのは、うちのお寺にお風呂に入りに来る人で、ここで何か飲んでいたのです。その人は民生委員とか福祉のプロじゃないですよ。「ところで、昨日の夜中にコンビニへ行ったら、おまえのところの隣の隣の家のあいつがいたぞ。あいつはどこかへ行っていたんじゃないのか?」「引きこもりなんだよ。」と話をしました。「ちょっと、行善寺へ連れてこいよ」。それで連れて来たんです。その時に、偶々子供たちに会いました。「ごちゃまぜ」の場所ですから。そしたら、「ああ、久しぶりに子供見た。」と、言いました。それはそうですよね。引きこもりで夜中にしか出歩かないので、子どもに会うことが無いわけです。ところが、見た。これから彼は元気になる。

この人はプロダンサーなのですが（資料67）、股関節がだんだん動かなくなり、整形外科を受診したのですが、治

らない。原因が解らない。ある時、この人は知的障害の高齢者の方ですが、何と、「私が治してあげる。」と言うわけです。治せるわけがないです。整形外科のプロでさえ解らないのに。ところが、治っていきました。二、三ヶ月もしたら、彼女は元気になった。彼女が言うには、私は自分の教え子から、「先生、ちょっと体の調子が悪いんじゃない？」と言われた事が、ストレスになっていたのかな、メンタル面だったのかもしれないと。今は随分回復しました。

この人は障害のあるダウン症の人ですが（資料68）、子供の面倒を見ています。これは私の撮った写真ではありませんが、ちょうど法要をしている時です（資料69）。この人はＡＤＨＤという多動症の子です。近くに小学校があるのですが、すぐに逃げ出してうちのお寺にやってきます。走って来るのです。学校は居心地が悪いようです。でも、お寺に来ると何故か落ちつきます。ここに本堂があって、お経が聞こえてきます。ちょうどその最中に、彼は動き回ってどうしようもない多動性の障害を持った発達障害の子ですが、その子に手を合わせようと言う。僕は、この写真をうちの職員が撮ってくれたことに本当に感謝しています。「ああ、良かったなぁ。」自分の知らないところで、知らない人が手を合わせているという感覚というのは、先ほどのつながりという意味、何かあるのではないかと。薬や、あるいは外科的な手術をしなくても、人は関わることで元気になるということが、先ほど来、科学的なデータをもって話せる時代になってきました。ということは、ここが我々寺院の大切な役割、今まさに地域が崩壊しようとしている中で発揮されるべきタイミングなんじゃないか。いろんな人が集まってきて、元気になる。行善寺には子供たちや、障害のある人や、認知症の人たちと、それを支える福祉の人たち以外にも、全く元気な人や、あるいはいろんな人たちが集まって、一日大体千人ぐらいですね（資料73）。こんなことがだんだん地域を元気にする。

われわれ寺院は、例えばおついたち参りとかあると、二日市が立つ、昔は三日市が立つ、四日市が立って、八日市が立って、寺社仏閣の周りには必ず人が大勢来て、そこには市が立ち、いつの間にか消費が進み、そしてにぎわいとなる。怪しい人も店を出し、その中でひっかかったり、いろんなことが行われている。私の自坊でも、そういったも

のは昔はあったけれども、いつの間にか門前からは店が消え、そして閑散としてきた。そのところにまた市が立ったのです。うれしかったですね。酔っ払って、風呂上がりにみんなで悪だくみしだして、それで、市が立ったんです。どんなふうに言っているかといったら、「要らないものをみんなで交換するか、ここで」って言い出したのです。そしたら、それだけじゃないんです。「売り上げの一〇%、みんなで貯めよう。それが貯まったら、みんなで最後に集めて、それをまた町のために使おう。それを自分たちで相談して決めよう。」そういうふうな悪だくみをしている。そういったことで地元の人間が主体になって、一軒ずつ増えていきました。

私たちのお寺には妙林柿という、日像上人がちょうど京都に上がるまでに来られたときに、出すものがないということで、渋柿を焼いて出した、その種が芽になって出たということで、妙林柿という由来の柿があります。住民の人が「ありがたい柿色にしよう」と、オレンジのシートを地元の人が考えて、「柿の市」という名前までつけていただきました。こんなことが私たちにとっては本当にありがたいなという日々なのです。

「ごちゃまぜ」という言葉は、裏返せば社会的排除。私たち仏教界というのは、あまねく悉皆成仏ということを、私はしっかり理解しているとは思いませんが、少なくとも地域の中にいたら、そういったことを教えていただける、そんな場かなあというふうに思っています。

時間となりましたので、これで終了させていただきたいと思います。ご清聴どうもありがとうございました。

司会　先生、どうもありがとうございます。ご質問を、六分ほどしかないのですけども、お受けしたいと思います。ご質問のある方は手を挙げていただいて、所属とお名前を言っていただければと思います。どなたか、ご質問のある方いらっしゃいますでしょうか。はい。

質問1　雄谷先生、ありがとうございました。実は先月の末に、大阪で社会福祉事業の経営セミナーに行かせていただきまして、雄谷先生のお話もそのときに伺ったのですが、質問の時間があのときはなかったものですから。私は知的障害者の就労支援のＮＰＯを運営しておりますけれども、今、行政のありようで、大手の事業者がたくさん入ってこられまして、なかなか経営が厳しい状況になっています。一番欲しいのは、例えば右腕、左腕になってくれるスタッフを育てるっていうことがとっても大変で、結局自分が動かないと事が回らないという状況に、今、直面していまして、困っております。先生のところだと、事業が障害者の支援、それから老人介護と、多岐にわたっていますよね。そうなると、スタッフの管理と職員の育成、それと行政の信用をもらうにしても、窓口が縦割りでばらばらだと思います。そういうところも含めて、先生はどんなふうに管理されているのかなというところを、ちょっとお伺いしたいんですけれど。

雄谷　どうもご質問ありがとうございます。社会福祉の制度のことに関しては、多分いろんな形で、どういうふうに助成金を取るかとか、そんなことは一定のルールがあると思いますので、そういったものは省かせていただくと、私の目的は、人を育てられる人を育てたいということなんですね。ありとあらゆる、いろんな、例えば世の中にいる名社長さんとか、いろんなリーダーという方々はたくさんおられると思いますけれども、その人を見たのでは、その人は全てすばらしいですよね。トップの人たちのお考え、あるいは話し方っていうのは非常に優秀だと思いますから、それを見たらわからないですね。皆さんすばらしい。でも、一つだけ見抜くことができるっていうのはある。それはナンバーツーを見ればわかるってことです。その組織のナンバーツーを見ればわかる。ナンバーツーを見たらわかるっていうのはどういう意味かというと、一人で頑張っているっていう名社長もいるとしますよね。でもそうではなくて、人を育てないと。今言われるように、いろんなものは、手法はわかっても心がついていかなければ必ず失敗する。

そうすると、人、その上が育てているナンバーツー。でも、人を育てられる人を育てるということは、自分が例えばいるとすると、自分の下の育った人間だけを見ていてもだめですよね。自分が今育てている弟子なり、あるいは社会福祉法人の職員なりっていうのは、さらにその下を育ててこそ、ようやく自分が評価される。そうすると、これは無限連鎖で、切りがないんですね。なぜかというと、僕が育てた人間ではなくて、僕が育てている人間が人を育てないとだめだ。そうすると、その人間はさらに下の人間を育てないとだめだということなので、これはゴールがないんですね。全くゴールがない。でも、何となく、それは大儀なことで言えば菩薩行という話になるのかもしれませんけれども、やはり、そこまでのスパンを持って見ていかなければ難しいかなというふうに思います。

実を言うと私自身も、祖父の作ったこの事業を受け継いだのは平成七年からですが、当時は本当に子供の施設だけでしたから、そこから次をつなぐ、次世代をつないでいく人たちを育てるには非常に時間がかかりました。ですから、一年や二年とかっていうことでは中々上手くいかないのかなっていうのは自分の実感なんですけど。やはり若くてもいいですから、いろんなことをやらせてみるということをしないと、伸びていかないなというのが、自分の実感です。青年海外協力隊に行ったりとか、新聞社に行ったりとかっていうことで、そこで過酷な労働条件もありましたし、あるいはその中で、お寺もそうですし、社会福祉法人もそうですし、そこで自分の下につながってくる人たちをどう育てていくか。結局は自分の鏡だなというふうに思いますので、何といいますか、技術ではないような気がします。最後はやはり、きちんとした理念というか、一本そこに思いが通ってなければ、これはどっちから入っても同じかなというふうに言うと、宗門の方に怒られるかもしれませんが、やはりそういった、人のそばに立ってものを考えるということが優先できる人でなければ、結局は、制度を知ったところで難しいなあっていうのが実感なんです。

どうでしょうか。一度ぜひ遊びに来てください。どんなふうに現場が一緒にやってきたかということも、まあ、いい話も悪い話もたくさんあるでしょうから、ぜひお越しいただければ。また何かそこで化学反応が起こって、お互い

にいいところを学び会えるような機会になればいいなと思いますので、どうか、ご遠慮なしにお越しいただければと思います。

司会　よろしいですか。お時間も限られていますので、以上をもちまして、雄谷先生のご講演を終了させて頂きます。

雄谷　それでは、お題目三唱で終わらせていただきます。南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経。どうもありがとうございました。

司会　いま一度、雄谷先生に大きな拍手をお願いいたします。雄谷先生どうもありがとうございました。

「社会福祉法人 佛子園」の理念

社会福祉法人 佛子園
BUSSI-EN

行善寺に戦災孤児たちを預かることから始まり、1960（昭和35）年3月、白山市北安田町（当時は松任市）に社会福祉法人佛子園を開設。
これまで50年以上にわたり、つねに福祉のパイオニアとして既成の枠を超えた独自の福祉サービスを創造し、提供しています。

【法人基本理念】

「PLVS VLTRA～さらに彼方へ～」

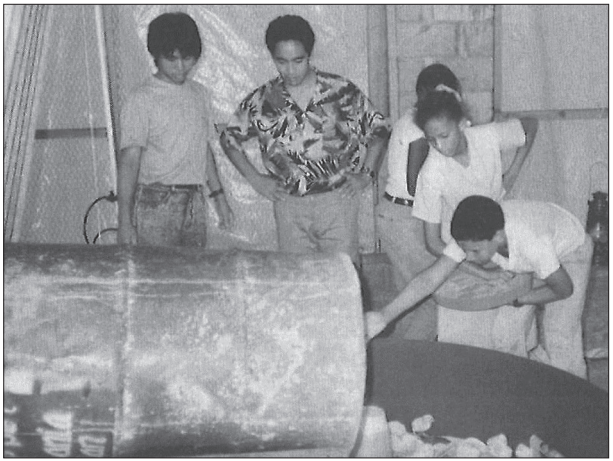
【基本方針】

わたしたちは一人ひとりが
暖かいまなざしと和やかな笑顔
やさしいことば
感謝と思いやりの心
譲りあう気持ちを忘れず
心に安らぎと生きるための
ゆとりを提供できるよう努めます

資料２

資料３

資料５



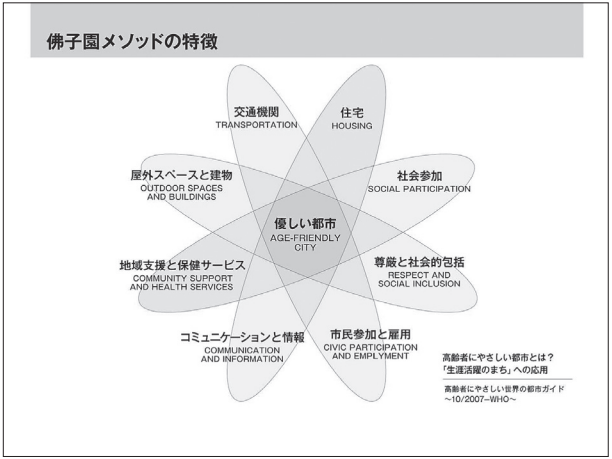
資料８

資料10

資料12

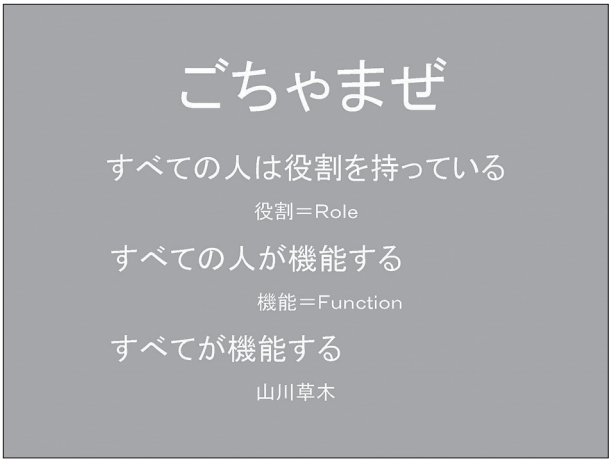
資料11

資料14



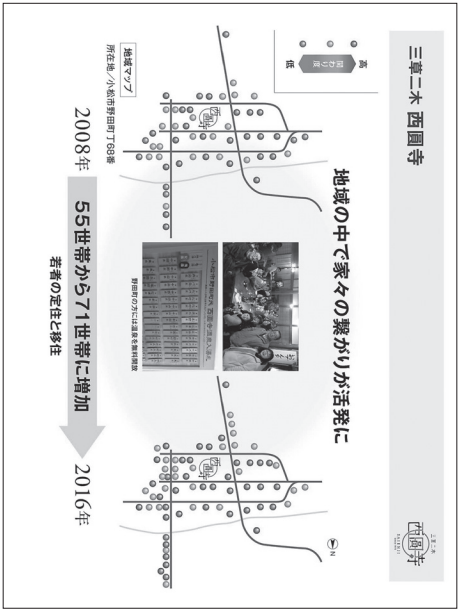
資料15

資料17



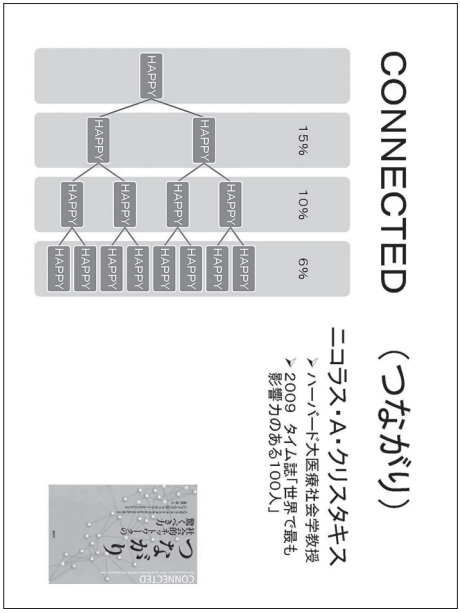
資料18

資料19



資料20

資料21



資料22

資料23

生きがいと生存率の関係

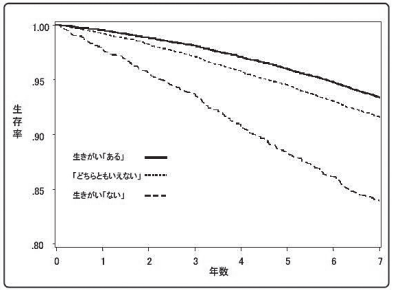
生きがいのある人は、生存率が高くなる傾向にある。

対象者：
宮城県大崎保健所管内1市10町に住む国民健康保険加入者のうち、1994年10-12月時点で40-79歳の者全員（54,996名）

質　問：
あなたは「生きがい」や「はり」をもって生活していますか？
（全体：健康状態、生活習慣など12ページのアンケート）

回　答：
「ある」＝25,596名（59.0%）
「どちらともいえない」＝15,782名（36.4%）
「ない」＝2,013名（4.6%）

追跡調査：
死亡・生存、死亡年月日と原因を9年間にわたって調査



（Sone T, et al: Psychosom Med, 2008;70:709-715）

（資料出所）日本版CCRC構想有識者会議（第1回）辻一郎委員提出資料　14

資料24

「人生の目的」と要介護発生リスクの関係

「人生の目的」がある高齢者は、要介護になりにくい傾向にある。

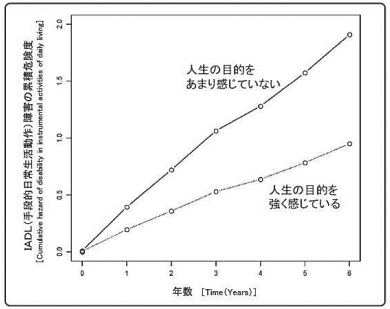
対象：
米国シカゴの40才所の高齢者住に住む人々で認知症・要介護状態のない人々（N=970）

調査：
心身機能（認知機能・生活自立度など）、「人生の目的」があるかどうか、など

追跡調査：
生活自立度などを毎年

追跡期間：
平均4.5年

結果：
「人生の目的」がある高齢者では要介護の発生率が約40%低下



（Boyle PA, et al: Am J Geriatr Psychiatry, 2010;18:1093-1102）

（資料出所）日本版CCRC構想有識者会議（第1回）辻一郎委員提出資料　15

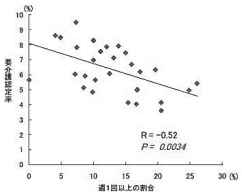
資料25

地域活動への参加率と要介護認定率の関係

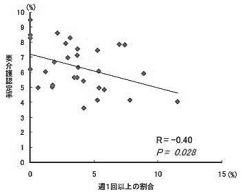
地域活動（ボランティア・趣味活動等）への参加率の高い地域は、要介護認定率が低くなる傾向にある。

- 宮城県A市の40歳以上市民より5%無作為抽出（N＝4128）
- つきあい、他人への信頼、社会活動への参加などを調査
- 小学校区（n＝30）を単位としたエコロジカル・スタディ

スポーツ・趣味・娯楽活動への参加率と要介護認定率（男性）



ボランティア・NPO・市民活動への参加率と要介護認定率（男性）



（坪谷：第46回宮城県公衆衛生学会，2010）

（資料出所）日本版CCRC構想有識者会議（第1回）辻一郎委員提出資料　17

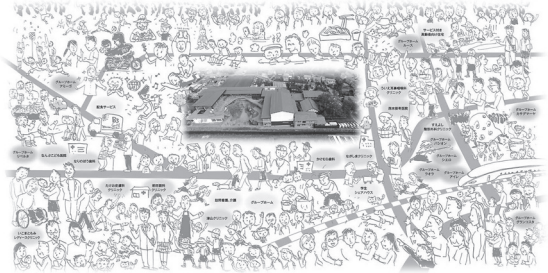
資料26

【タウン型 生涯活躍のまち】

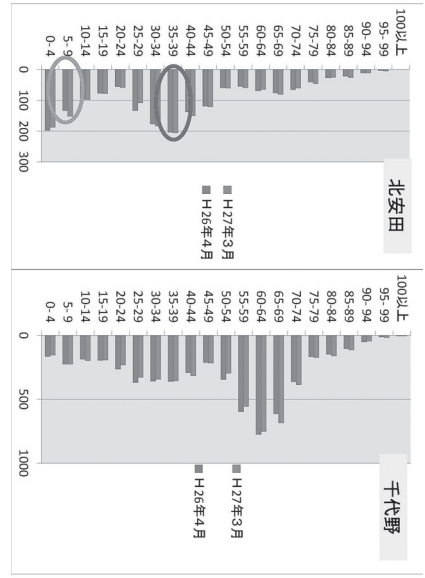
B'sプロジェクト［2015年～］

多機能 地域医療福祉連携の住民自治モデル

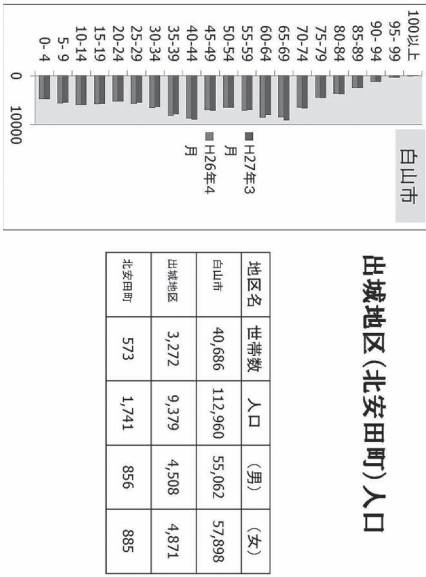
- 街づくりの拠点、住民自治の拠点
- ウェルネスを通じた健康促進事業
- あらゆる人が集まりつながる駆け込み寺



資料44



資料46



出城地区（北安田町）人口

地区名	世帯数	人口	（男）	（女）
白山市	40,686	112,960	55,062	57,898
出城地区	3,272	9,379	4,508	4,871
北安田町	573	1,741	856	885

資料45

開所式は町の運営で開催

出城地区各町会役員・北安田町内会・各班長・北安田振興会・出城公民館館長
出城地区福祉推進委員・民生委員・福祉推進委員・親和会
出城地区自主防災委員会・白山市消防団
おまかせ会・むつみ会・うらら会・ところき会などが、中心となり開催

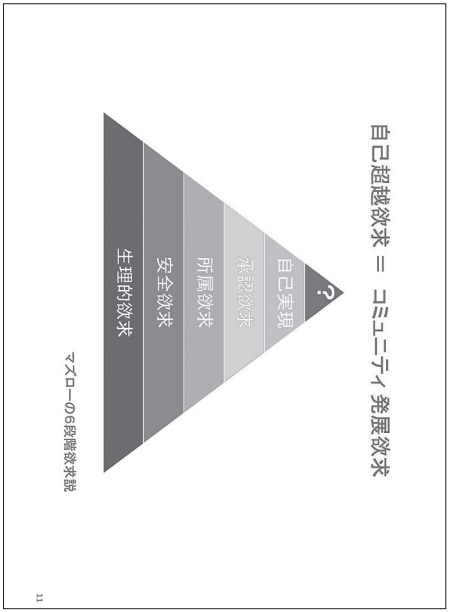
◇従業員募集は町会主体で募集
地域雇用（15名）
就労（65名）

9

資料48

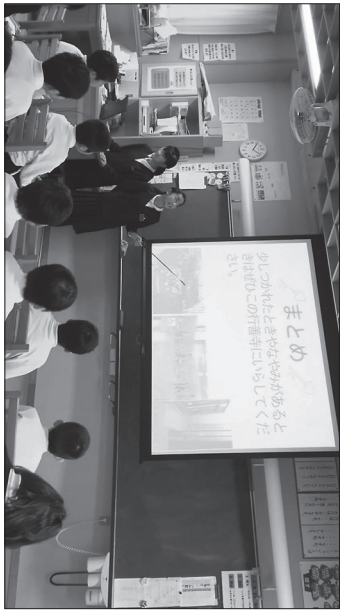
資料47

資料49

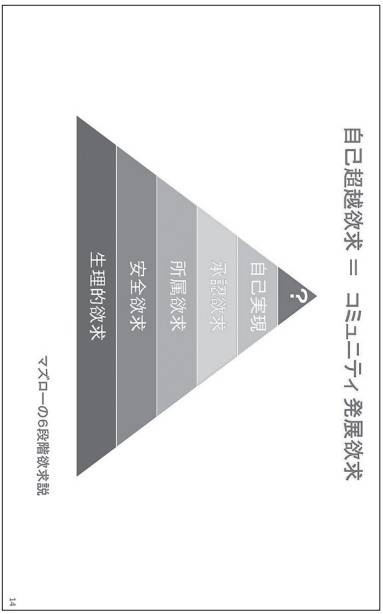


資料50

資料51



資料52



資料53

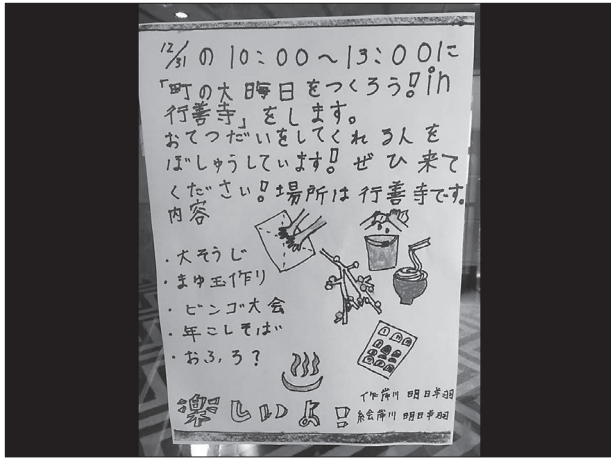
資料55

資料54

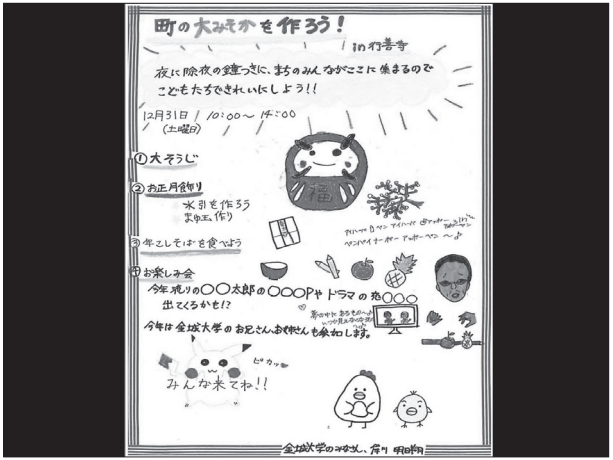
資料56

資料60

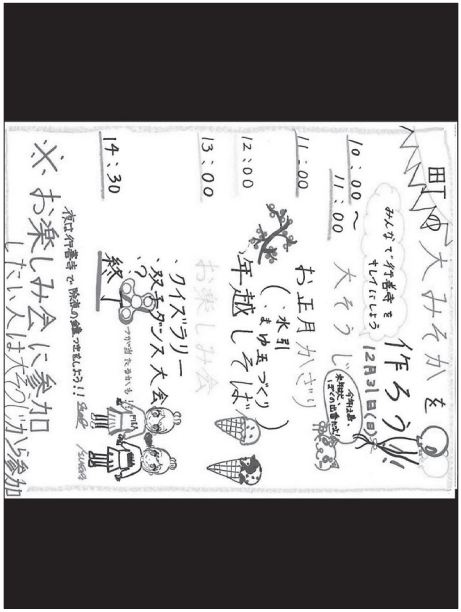
資料61



資料62



資料63



資料64

資料66

資料65

資料67

資料68

資料69

ごちゃまぜ

第三の医療

Behavior Health
公衆衛生学　Public Health

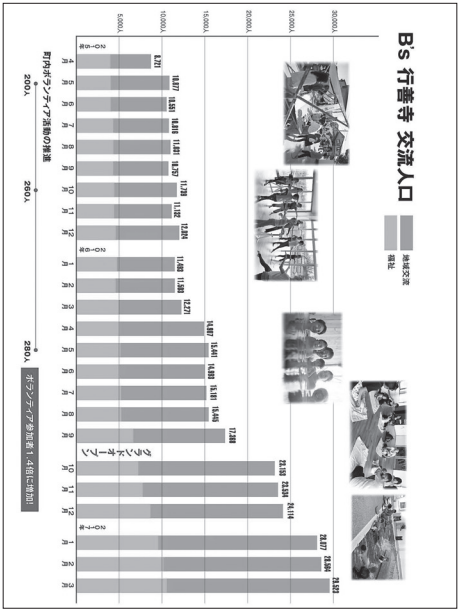
資料70

ごちゃまぜ

人と人とのつながりと健康のメカニズム

①人と交わるだけで健康になる
②つきあう人やグループでその人の行動が決まる
③人とのつながりからうまれる支援(ソーシャルサポート)

資料72



資料73

資料74

ごちゃまぜ

= Social Inclusion

社会的排除

⇔ Social Exclusion

資料75